

2020年3月29日 礼拝説教要旨

詩編講解説教9 「主よ、憐れんでください」

詩編9：8～15、マタイ20：29～34

今日は第9編8～15節を中心に読みます。この第9編の冒頭のところに「アルファベットによる詩」とあります。次の10編も同じようでありまして9編と10編は元来つながった一つのものではないかと言われています。アルファベットというのは、日本語ではよく分からないのですが、原文を見ると詩の冒頭の言葉の頭文字がアルファベットの順番で出てくる。英語ではABCですが、ヘブライ語ではアーレフ、ベェト、ギーメル、ダーレツとなります。そのようにこの詩がアルファベット順に構成されている。ヘブライ語というのは時々こういう遊びをするのですが、他にも詩編では25、34、37編など9つ出てきます。

なぜこういった形態をとるのか。ある聖書学者は、これは教育的意味合いが強いと言います。わたしたち日本人も昔はひらがなを憶える時に「いろは歌」で憶えた。「いろはにほへとちりぬるを」そういう感じでこの詩自体をイスラエルの民は暗唱していたのではないかと。また特に興味深いのは、このような言葉遊びのような形式はバビロニア捕囚期以後のものと言われます。ですからこの9編にはそういう捕囚の出来事を思わせる言葉が幾つか出てきます。7節「永遠の廢墟」10節「虐げられている人に」13節「流された血」16節以降では「異邦の民」という言葉が繰り返されます。異邦の民に占領され、虐げられ、殺されて、町は廢墟になる。それはイスラエルにとって国の存亡の危機であるのと同時にまさに信仰の危機でありました。そういう時にもう一度信仰を再確認する。神の民としてのアイデンティティーを確立する。そういう意味でこのようにいろは歌のような詩が教育的なものとして用いられたのではないかと思われま

そしてこのところの一つの鍵となる言葉が13、19節にあります「貧しい人」という言葉です。実は、この元の言葉は「貧しい」とも「謙遜、柔和」とも理解される言葉です。つまり具体的な窮乏とすることもできますし、同時に神さまの前にへりくだる信仰的な謙遜さとも考えることもできる。わたしはこの二つの側面はとても重要だと思います。具体的な窮乏の中で、困難の中で、神さまの前にもう一度自らの存在、それは救いを必要としている罪人としての自分ですが、そういう自分を深く省みる。イスラエルにとっては、それは捕囚の出来事でありました。実際に国を追われ、命の危機に直面した時に、彼ら自身が神さまの前にもう一度へりくだり自分たちの在り方を問い直したのです。あの捕囚とは、イスラエルにとって信仰を再確認し、回復する時だったのです。

そしてわたしたちにとってそれはまさに今なのです。皆さんも日に日に新型コロナウイルスの感染者が増えていく中で、大変、不安な日々を過ごされていると思います。わたしは一人の牧師として、この危機的な世界の状況をどう捉えるのかということをお聞きしながら毎日過ごしています。そして今この詩編の御言葉に耳を傾ける時に、ここにわたしたちの叫びがあることを認めざるを得ません。この詩人の貧しさと今のわたしたちの貧しさを重ね合わせて読まざるを得ないのです。この貧しさとは、無力で、一人では生きていくことができない人間の究極的な弱さです。人間がいかに貧しく、無力な存在であるか。この人類がどんなに叡智を極めたと思っても、経済が豊かであっても、それは何にもならない。そのことを本当に思い知らされる日々です。

けれども、この無力さ、貧しさを知ることが、実はわたしたちの信仰にとって一番大切なことなのです。確かに不安です。世界はどうなってしまうのだろう。わたしたちの国はどうなるのか。家族の命、自分の命もどうなるか。今、わたしたちは本当に何も無い。身を守る術がない裸のような状態なのです。でもこの貧しさがわたしたちを御前に立ち返らせる。そして心から神さまを尋ね求め、叫び、「憐れんでください、主よ」と祈ることができるように導く。どうしてか。それは神さまがこの貧しいわたしたちを顧みてくださるお方だからです。「あなたを尋ね求める人は見捨てられることがない」(11節)「貧しい人の叫びをお忘れになることはない」(13節)今日の御言葉はそのことをはっきり告げています。今こそ、この貧しいままでわたしたちは神さまの元に立ち返るのです。わたしたちは今そういう時を過ごしている。あの主イエスの語られた「貧しい人々は幸いである」との御言葉がわかるときであり、今日読んだ二人の盲人が「主よ、憐れんでください」と叫び続け、眼が開かれた。その救いの出来事がわかるときなのです。

「主よ、憐れんでください」は今日の詩編にも出てまいります。「憐れんでください、主よ。死の門からわたしを引き上げてくださる方よ。ご覧ください。わたしを憎む者がわたしを苦しめているのを。おとめシオンの城門で、あなたの賛美をひとつひとつ物語り、御救いに喜び踊ることができるように」(14、15節)14節に「死の門」とあります。これは陰府に至る門、神さまから最も遠いところに行く門です。憐れみの神さまはそこまで下り、そしてそこからわたしたちを引き上げてくださる。15節「シオンの城門」に迎えてくださる。この二つの門は対になっています。シオンは礼拝の場、神さまの臨在の場所と言われます。神さまに近づく門へ迎え入れられる。死の門、陰府に至る門からシオンの城門、神の国入る門へ。それはイエス・キリストの十字架とよみがえりの御業が示す救いに他なりません。

それはわたしたちが死なないということの意味しているわけではありません。わたしたちもいつかは死ぬでしょう。この地上の命は終わります。でもその死は死の門に入る死ではない。シオンの城門に入る死なのです。『ハイデルベルク信仰問答』が「わたしたちの死は、自分の罪に対する償いではなく、むしろ罪との死別であり、永遠の命への入口なのです」(問42)と告白するのを思い起こします。主の憐れみがこの死の苦しみからわたしたちを解放します。「主よ、憐れみたまえ」この祈りは旧約の時代からわたしたち信仰者にとってかけがえのない祈り言葉です。たとえどんな貧しさの極みにあってもキリストゆえに「主よ、憐れみたまえ」と祈ることができる。そこに本当の幸いがあります。